

第2回 地域振興官民協働委員会議事概要

日 時	平成 24 年 9 月 19 日 (水) 13:30~17:00
会 場	佐渡市中央図書館
出席者	松田祐樹、渡辺啓嗣、鈴木涼太郎、(欠席：小林かおり) 大橋幸喜、藤原淳、斉藤昌彦、中村長生
議 題	<ul style="list-style-type: none"> ■地域の資源を活かした有償のボランティアなどの事例紹介 ■地域の誇りや宝物が当たり前になっており、良さに気が付いていない。発想や視点を変えるために必要なことは何か。 ■各地で実施している取組の情報を集約し、発信、協力、ネットワークするためにどのようなことが必要か。 ■事務局やリーダーをサポートするためにはどのような仕組みが必要で、地域を取りまとめる中間組織が必要。集落の集合体として地域の活動を受ける受け皿としてどのような体制の構築について ■若者が定住するための、コミュニティビジネス (CB) などの起業支援
議事概要	<p>①資料説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ■コミュニティに関わるビジネスの育成のために、つきさら流 CB 育成術が分かりやすくまとまっているので参考にしてほしい。海士町の事例も検証したが、資金、支援、仲間づくり、意識の統一などの相乗効果が重なって成功となっている。佐渡においては、単発な補助事業、ネットワークの不足、意識の格差など、成功しづらい状況にある。地域を限定して成功させる必要がある。 ■佐渡市の現在の事業の概要については、施政概要を参考にしてほしい。また、地域振興課において、地域活動支援として各課で展開されている事業を紹介。各課の横の連携が取れていないことが課題。 ■有償ボランティア制度の事例については、無償か有償かの線引きがあいまいで、全国的な事例では公共交通が廃止となった過疎地域での高齢者の輸送の事例が主なものになっている。その他、高齢者へのお弁当の宅配など、行政が委託費を出して必要経費を賄いながらボランティアで事業を行っているケースとなっている。 ■鈴木先生より、前回の議事を振り返って <ul style="list-style-type: none"> ○定住の他、半定住など幅広い「佐渡暮らし」の検討と支援があっていると考えている。 ○地域の宝物は発見しただけでは継続しない（使わなければ忘れられる。）ので、「創っていく」ことが必要。それには「誇れる仕組み」がいる。(定期的に誇る場、地域ガイドなど。) ○各地域のリーダーに負担があることは理解するが、第三者からリーダーと指定される (例：観光カリスマの矛盾) ものではなく、活動の結果として周りからリーダーとして生まれて認識されてい

る。リーダーの支援よりも、多くの人を巻き込む必要が大切である。引っ張って行く人だけがリーダーではない。汗をかいてくれるリーダーなどもっと幅広くリーダーを捉えていい。本当に誰もリーダーがいない地域はどうするのが課題になってくる。⇒地域への思いの強い人がリーダーなのではないか。想いのある人を作ることが必要だ。

○全国の成功事例をそのまま佐渡にあてはめるのではなく、事業を実現するための、どのように立案し、そのプロセスで多くの人を巻き込んでいく、ことが成功のポイントである。

○少数の成功例を作る方がいい。佐渡は広く、各地域で事情が違おうと思うので、「地域が自ら動いて地域活性化のための事業を考える」ことを『支援する事業』が必要。(二段構え)可能性のある地域で何が出来るか考え、活動することに支援するための事業があることが理想。

○CBは地域活性化の一つの手法であり、それだけに固執するのは危険。CBだけでなく、多様な議論を。

○地域で話をする場を作るために行政がその場を提供することは必要。

■地域活性化拠点形成事業について

CBのビジネスリスクもある。100%成功するわけではないので、幅広く活動を行う必要がある。ビジネスが目的なのか、拠点作りが目的なのか、定住も必要、交流も必要、二地域居住の支援など、「拠点」となる事業に、多様な「枝」がぶら下がってくる。

地域に受け入れられるための活動も必要。一年目は地域との信頼関係を構築することに集中する必要がある。

ビジネスモデルなどの関係で、島内3箇所程度で勉強会や地域のサポートを行う。道普請などができない地域への人材派遣などで活動資金をうまく作っていく。市の助成事業や、中山間地域直接支払制度などの資金をうまく使えないか検討していく。

「拠点」という意味ではニュアンスが違うようなので名称は考える。4年後の自立を目指す。リスクの想定も必要。

多くの人を巻き込む手法が必要。エリアの選定のため、学区位で検討してみてもどうか。

チャレンジ事業などの地域振興課が所管している事業もあるので、審査を中間支援組織の人が、事務費を確保しながら募集、継続的な支援をしてもいいと考える。

その他、過疎債、地域振興基金、離島交付金、集落支援員の特別交付税措置など、過疎対策・地域対策に関する予算はある程度見込める。(継続していくことが必要。)

■地域観光等情報プラットフォームづくり事業

観光協会などの情報では、観光の一部分の情報しか発信されていない。佐渡の暮らしや地域の情報を集約するために、地域活動支援員などを配置し、情報収集に当たってもらい、発信していくもの。

■ご当地通貨創設普及事業

アイデアとしてはいいが、課題、問題も多くもう少し検討を加える必要がある。

観光客に購入してもらい、地域で使ってもらおう。佐和田ではお金が使えるところがたくさんあるが、外海府などに行くと、飯屋もない、お土産売り場もないため、お金を使えない。田舎に行けばいくほどお金が使いたくても使えなくなる。地域通貨を使って地域への感謝、素適体験、景観に払ってもらい、地域への経済効果を狙う。

■地域の物語づくり事業

地域の食や作業などの日常を記録し、発信していく。映像の中で紹介された物がお土産になるような仕組みを。地域の活動を紹介しながら、地域との信頼関係を構築するために必要であり、とっかかりをつける意味でも大切なのではないか。

内容としては、味噌づくりの作業の記録、その前の大豆の生産、ワカメ刈りやワカメ干しなど、地域の作業を一年を通して記録していく。それらを加工してCMにしたり、物語性を加味してお土産にしていく。地域の全員が主人公でいい。

■地域で六次産業事業

生産を個人、集荷して販売、カフェ、野菜等のプレカット（一次加工）、ホテルに納品など、複合経営を地域で行うか、出資者で合同会社を作って対応できないか。（地多氏より提案）

アンテナショップだけでは成り立たないので、正面はカフェとしても裏の加工場の方が大きい施設をイメージ。行政に施設整備等を支援してもらい有志（ホテル、料理、喫茶）で運営していく。

一人で、生産から加工までを実施してしまうと、地域活動に参加する余裕や時間がなくなってしまい、逆にリーダー疲れを引き起こしてしまうことが懸念される。

（雪国食文化研究所が参考になる。）

小林委員より、体調不良により、委員の辞退の申し出があった。（委員了承）地域の食を活用したCBや事業の展開も出てくることから、「海府荘の地多正光シェフをメンバーとしたい」との申し出があった。（個人と調整する。）また女性の委員もいた方がいいと考えているが適任者の候補がなかったため、保留する。

	<p>数値目標として出しづらい事業となるので、地域のみんなが、事業を始める前と始めた後でどのような意識の変化、暮らしやすさなどの状況が変わったかをアンケートして比べたい。</p> <p>結論として、地域活性化拠点形成事業を骨組みとして、整理する。事務局において、次回までに事業概要の整理とそれに伴う予算経費を事務局（地域振興課）で積算する。</p> <p>今までの議論も踏まえて、県内の先進地で知りたい情報があれば研修にいてもいいのではないか。中越地震後の中越地方のC Bの取組や海士町の取組、定住、地域対策。上越かみえちご山里ファンクラブへの研修もあっていい。(次回検討)</p>
<p>次回検討 事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■地域活性化拠点形成事業をベースに肉付けを行う（大洋紙を用意して肉付けしていく。） ■学区位で地域を分けて地域の選定（佐渡市全図用意） ■多くの人を巻き込んでいくための拠点づくりとリーダー確認 ■官民協働委員会は少人数でもいいが、協働委員会と地域と情報を共有するネットワークづくり（地域振興官民協働委員会と地域リーダーとのパイプ作り）が必要。 ■県内等への研修について ■次回 10/18 13:30から（本庁第一会議室）